

- ▶ 総合医療相談センターのあゆみ / 総合医療相談センター長・副院長 橋本 政典
- ▶ 着任のご挨拶 / 手外科部長 河野 慎次郎
- ▶ 医療連携登録施設のご紹介 / 宮田胃腸内科皮膚科クリニック 宮田 直輝
- ▶ 新任のご挨拶 / 呼吸器外科部長 水谷 栄基
- ▶ 新任のご挨拶 / 血液内科部長 米野 由希子
- ▶ 着任のご挨拶 / 心臓血管外科医長 明石 興彦

総合医療相談センターのあゆみ

総合医療相談センター長・副院長 橋本 政典



「^{しゃほちゅう}社保中」がJCHOの一員になったのは私の着任する4年前、2014年です。社保中と言えば、我々外科医にとっては「大腸肛門病センター」があまりにも有名でしたので、社保中

の名称がなくなるのはもったいない、しかもなぜ東京山手^{やまて}なのかと思いました。そして赴任後、新しい病院名は社保中が東京社会保険協会 山手病院として1954年に開設されたことに由来することを知りました。

改めて沿革をみると大腸肛門病センターのみならず、病院開設以来、循環器検診センター、人間ドック、透析センター、内視鏡センター、炎症性腸疾患センターなどが設立され、それが今でも当院の主戦力になっていることがわかります（表）。

当院の地域医療連携が本格化したのは2002年であり、同時に広報誌である「医療連携つつじ」が創刊されました。創刊号で当時の斎藤院長は「診病連携」の重要性、地域医療支援の方向性を明確に示しています。その後、地域連携室に専任看護師長を配置し、事務員だけでは困難な各職種間の調整を可能にするとともに連携医の皆様との顔の見える関係を構築してきました（連携つつじ第5号）。組織構築の結果、それまで医療連携室

の窓口業務を行っていたMSWは、患者相談業務である『経済的な問題』『療養中の心理社会的問題』『退院支援』に専念できるようになりました（第8号）。このような患者相談窓口機能と地域連携室を包括し2004年に総合医療相談室が誕生しました。さらに入退院支援機能を追加し2018年4月には総合医療相談センター（通称8番、以下センター）が発足し現体制となりました（第33号）。センターは地域医療連携室、入退院支援室、患者相談室を擁し、センター長（副院長）1、副センター長（院長補佐）1、地域連携室長1、看護師長1、入退院支援看護師7、医事課長1、地域医療連携係長1、MSW3、事務員7の計23名で構成されています。2021年度からは伊藤恵師長が病床采配も行っており、センターは紹介患者さんが初診から退院後まで一貫してお世話するコンシェルジュ的な役割を果たしています。

そのほか、患者相談室では患者さんの社会的・経済的・医学的相談に対応しており、専任看護師長を中心に問題解決に向けたサポートを行なっています。また、地域医療連携室では患者さんの診療情報提供の進捗確認や担当医師への督促、内視鏡・CT・MRI・レントゲン・骨密度・超音波検査・脳波などの検査の受付と結果の発送、年3回の広報誌「医療連携つつじ」の発行、連携講演会の企画実施、診療案内の作成を行なっています。詳細は当院のホームページの上部メニュー「医療関係

の皆様へ」から「医療連携つつじ」や「年報」を是非ご参照ください（QRコード）。

コロナ禍で連携医の皆様にお目にかかる機会が減ってしまい、大変ご無沙汰をいたしておりますが、吉田医療連携係長を中心に少しずつご挨拶にも伺って参ります。当院は竣工より35年を経過しており建物は古くなっていますが、より快適に療養生活を送っていただけるよう可能な限り日々努力をしていく所存です。機会がございましたら是非一度お越しいただき、床を磨いて明るくなった院内をご覧ください。これからも当院をよろしく願いたします。



東京山手メディカルセンターの沿革	
1947.11.24	(財)東京社会保険協会山手病院設立 90床 (大久保2丁目)
1954.5.13	社会保険中央病院と改称
1955.4	高等看護学院を設立
1957.9.5	総合病院に認定され、社会保険中央総合病院と改称
1958.1	循環器検診センター開設
1959.5	人間ドック開設
1960.2	肛門病センター開設
1975.5	透析センター開設
1987.5.31	新病院（現在の建物）へ移転
1997.8	内視鏡センター開設
1997.12	救急告示病院・東京都災害拠点病院に指定
2002	医療連携室設置（斎藤院長）、医療連携つつじ創刊
2003.1	医療連携専任看護科長就任
2004.4	総合医療相談室設置
2006.1	炎症性腸疾患センターを開設
2010.7.15	第1回医療連携講演会開催
2014.4	JCHO 東京山手メディカルセンターとなる
2018.4	総合医療相談室を総合医療相談センターに改組
2019.8.28	東京都から地域医療支援病院の承認



着任のご挨拶

手外科部長 河野 慎次郎



2022年4月よりJCHO 東京山手メディカルセンターの手外科部長に就任した河野慎次郎と申します。1994年に東京大学医学部を卒業後、東京大学整形外科に入局し、東京大学医学部付属病院分院整形外科、東芝病院、

東京労災病院、富士吉田市立病院、名戸ヶ谷病院、東京大学付属病院と勤務し、東京大学大学院医学研究科で学を取得、埼玉医科大学で助教、講師、准教授を務め、今回 JCHO 東京山手メディカルセンターに赴任となりましたが、この期間中、大学院の期間を含め、ほぼ一貫して手外科診療に従事してまいりました。

手外科とは主に指先から肘くらいまでの範囲における整形外科の疾患（骨折、捻挫、神経血管腱損傷、変形性関節症や関節リウマチなどの慢性の疾患、神経疾患、腫瘍、先天異常、感染症など）を扱う整形外科のなかの一分野のことを指します。手は体の他の部分とは異なり、小さな部位に多くの骨関節、筋肉、腱、神経、血管が集中し、それらすべての組織が非常に小さいことが挙げられます。修復するに当たっては極めて繊細な操作が要求され修復が非常に難しいことがあげられますし、外傷などの場合には複数の組織が同時に損傷するため、治療も非常に複雑となる場合が多く、手術を行ってもリハビリがうまくいかなくて腱の癒着や関節の拘縮など動きが損なわれたままになることも多く、全体として治療が難しいことが多くあります。

そのため手外科は整形外科の中でも特に専門性が高いとされ、日本整形外科学会の整形外科専門医とは別に日本手外科学会によって手外科専門医制度が制定されています。整形外科専門医を取得後、さらに3年間の手外科研修を行い試験に合格すると手外科専門医の資格を得ることができます。もちろん私もこの手外科専門医を取得しておりますし、さらには専門医受験者の指導をおこなう手外科指導医という資格も取得しております。

昔から手の治療は経験のある専門医によって行われるべきと言われており、専門医と非専門医で治療成績が大きく変わってくる分野となっております。よくみられる腱鞘炎などに関しましても診断治療に関しまして多くの落とし穴があり、また

橈骨遠位端損傷、TFCC 損傷、母指 CM 関節症など近年では医学の進歩に伴い以前とは治療方針が大きく変わっている疾患も多く、上肢において診断治療に難渋している症例はもちろんのこと、手術をしなくても大丈夫に見える症例や些細なものかなと考えるような症例でも当科に紹介していただけると幸いです。特にレントゲンでは異常が解らず診断の見当がつかない症例や、どこの部位が痛いのかあまり明確で無い症例などは是非紹介していただきたく存じます。



手術風景:手の手術では拡大鏡を使用しています。

手や肘の疾患であれば、先述したほぼすべての整形外科疾患（骨折、捻挫、神経血管腱損傷、変形性関節症、関節リウマチ、神経疾患、腫瘍、先天異常、感染症など）の治療を行います。疾患名を挙げますと、指骨骨折、舟状骨骨折、橈骨遠位端骨折、肘関節部骨折、靭帯損傷、TFCC 損傷、屈筋腱伸筋腱損傷、神経血管損傷、変形性関節症（ヘバーデン結節、ブシャール結節、母指 CM 関節症、変形性肘関節症など）、手根管症候群、肘部管症候群、デュピュイトラン拘縮、先天異常（重複母指、合指症など）、化膿性腱鞘炎、化膿性関節炎、関節リウマチ、SLE 関節炎、骨軟部腫瘍、拘縮（手指、肘）、などの上肢疾患が疑われている症例の紹介を何卒よろしく願いたします。



別府で学会：発表が2日目だったので、1日目は別府観光となり砂風呂チャレンジ

医療連携登録施設のご紹介

宮田胃腸内科皮膚科クリニック 宮田 直輝



宮田胃腸内科皮膚科クリニック宮田直輝と申します。新大久保にクリニックを構えてこの春3年目を迎えました。当クリニックはコロナと同時に始まったと言っても過言ではありません。開業当初より発熱外来、コロナ患者の対応に取り組んできましたが、その間東京山手メディカルセンターには笠井先生をはじめ救急外来の先生方やスタッフの皆様大変お世話になりました。紹介した患者様からは対応がすごく良かったと皆様口を揃えておっしゃいます。

当院は東京山手メディカルセンターから真っ直ぐ真南に向かい職安通りと大久保通りの間に位置します。当初新大久保を選んだ理由は父親が30年程前から新大久保で歯科医院をやっており、小さい頃からよく慣れ親しんだ街だったからです。また色んな国々の方が集まるというのも魅力的でした。

ここで少し私の来歴についてご紹介致します。高校は都立青山高校を卒業し、大学は台湾の台北医学大学

医学部を出ました。なぜ台湾にと思われるかも知れませんが、もともとのルーツが向こうであることもさることながら、医学の道と語学の勉強を同時にできないかと模索した結果向こうの大学を選んだというのが理由にあります。また台湾では中医学や鍼灸がカリキュラムに組み込まれていることも魅力の一つでした。台湾の大学を卒業し、台湾の医師国家試験に合格後日本へ帰国。2005年に日本の医師免許を取得し、慶應義塾大学病院にて初期研修を終えた後2007年同病院消化器内科に入局し4年間勤務と同時に博士号を取得。2011年から済生会済生会宇都宮病院での3年間の勤務を経て、腸内細菌と大腸癌の研究のためにテキサス州ダラスにあるSouthwestern Medical Center消化器内科にポスドクとして3年間留学しました。その後2016年より国際医療福祉大学三田病院に講師として戻りました。3年間勤務の間徐々に自分で色々やってみたいという気持ちが沸き起こり、2019年から1年



間新大久保にある長峰整形外科にて開業の修行をさせていただいた後2020年4月に独立致しました。

紆余曲折はありましたが、そのおかげで中国語、台湾語、英語、カタコトのタイ語（母方の実家がタイにあるため）が話せるようになりました。これはクリニックの特徴としても表れており、来院される半分くらいが外国の方で主に中華圏、東南アジア、最近では欧米の方もちらほらいらっしゃいます。

外国の方は細かいニュアンスが通じず日本での診療を躊躇うケースが少なくありません。当院が問診を取りトリアージを行い専門分野に振り分けるそういう役割を果たせたらと思っています。

当院では私の他に曜日別で大学病院から2名消化器内科医、1名皮膚科の非常勤医が勤めています。また毎月の第1週の金曜午後及び土曜午前には元東京山手メディカルセンター消化器内科部長の畑田先生がいらしています。設備としては経口、経鼻上部内視鏡、下部内視鏡（富士フィルム、EP-6000）、腹部エコー、レントゲン、心電図。皮膚科ではエキシマレーザー（ウシオ電器）があります。

現在東京山手メディカルセンターでは木曜午前消化器内科の外来も担当させていただいております。午後は消化器内科の齋藤先生をはじめ、佐野先生、廣瀬先生、齋藤（悠）先生や若手医師らと和気藹々とERCPの検査及び治療に当たっております。開業しながら自分のライフワークであったERCPをさせていただける機会を下さった消化器内科の齋藤先生、院長の矢野先生には大変感謝しております。また普段からお世話になっている救急部の笠井先生、炎症性腸疾患の深田先生、乳腺外科の橋本先生、大腸肛門外科の山名先生、外科の伊地知先生、久保田先生、皮膚科の鳥居先生、放射線科の竹下先生その他多数の先生方にはこの場をお借りして謝意を表したいと思います。いつも快く引き受けてくださる連携室の皆様にも感謝致します。

これからも地域の人々の健康を担う東京山手メディカルセンターの連携病院としてお互いに協力し合える関係でありたいと思います。今後ともどうぞよろしくお願い致します。

宮田胃腸内科皮膚科クリニック

〒169-0073 東京都新宿区百人町1-11-2 MOMOビル2F
TEL 03-5937-0668 FAX 03-5937-0663
<https://miyata-clinic.com/>



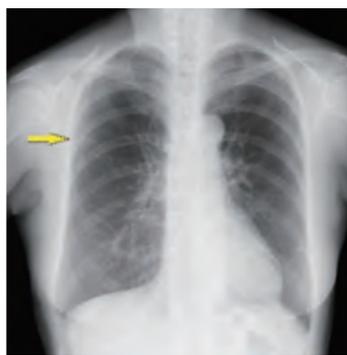


先生方には平素より何かとご指導・ご協力を賜り、心から感謝申し上げます。呼吸器外科の水谷栄基と申します。本年4月に森田理一郎先生から呼吸器外科部長を引き継ぎました。森田先生は当院の

呼吸器外科を20年間に亘り支えられ、また15年前には私自身が3年間ご指導頂きました恩師でもあります。当時からスタッフや患者さんに「格好良い上司をお持ちですね。」と言われておりました。今後も数年間は顧問の立場で外来を含めて続けてくださりますので、体制には大きな変更はありません。肺血管は心臓に近く、肺手術時では血管損傷により大量に出血する危険性があります。安全性が最重要な領域で有り、忍耐強く確実な手術を行うことを厳しく指導して頂きました。森田先生のご指導のもと本場の意味で呼吸器外科医に成長させて頂きました。その折に呼吸器外科専門医も取得させて頂きました。

3年前に森田先生から後を継がないかとお願い頂きましたのが、つい最近のように感じます。当時は、飯田橋にあります東京通信病院に勤めておりました。完全鏡視下胸腔鏡手術が進んだ病院であり、そちらで8年間研鑽を積みました。当院へ完全鏡視下胸腔鏡手術の技術を導入し、さらに発展させていくことを目標に、戻ってくる決心をしました。私のモットーは、「常にレベルの高い手術を行うこと」です。レベルの高い手術を行うことはあまり難しくありませんが、それを常に行うことは非常に難しいと思います。今日は調子が悪かったという言い訳は、手術を受けられる方には通用しません。調子が悪くならないように心掛け、さらに上手くいかない日でもレベルの高い手術が出来る下地を作ることを日頃から心掛けています。

矢野院長先生のご許可のもと、2020年10月から呼吸器外科は3人体制になりました。先生方からご紹介頂き、当科の手術数は徐々に増えてまいりました。山本沙希先生が赴任しておよそ1年半になりますが、今年で医師11年目となり呼吸器外科



専門医及び気管支鏡専門医を取得いたしました。本年5月から外来も担当するようになりましたので、ご指導のほどよろしくお願いいたします。

昨年の本誌では胸腔鏡手術について記載させて頂きましたので、今回は胸部レントゲンについて述べさせて頂きます。新宿区肺癌検診の胸部レントゲンの二次読影を担当させて頂く機会が増え、今更ながらレントゲン撮影・読影の難しさを痛感いたします。レントゲン画像はCT検査と異なり、複数の陰影が重なって画像が構成されているため、より高度な撮影技術や読影技術が求められます。レントゲン画像の読影結果とCT所見が合致していますと、思わず微笑んでしまいます。10年程前から新宿区市ヶ谷にあります東京予防医学協会保健会館で、2ヶ月に1回開催される東京チェストカンファレンスに参加させて頂く機会がありました。COVID-19感染症が広がり、2年間の中断を経て本年3月にWebハイブリッド形式で第184回カンファレンスが行われました。最若手の世話人にして頂いた関係で、再開の第一症例を提示させて頂く誉れに預かりました。「東京チェストカンファレンス」で検索して頂くと、所長の丸茂一義先生による詳しい解説付きの「良質なレントゲンの撮り方」や「読影のコツ」を視聴することが出来ます。レントゲン撮影時には管電圧を120kV以上に設定することが最も大切です。心臓や横隔膜に重なる部位や肺野の淡い陰影は、管電圧が低い場合には指摘が難しくなります。また以前のレントゲンとの比較読影によって新たな陰影を指摘できることも多くあります。折角の肺癌検診ですので、より良い撮影条件でより良い読影を心掛けたいと考えております。

当科を受診して良かったと、皆様に言って頂けるように努めてまいります。今後ともご指導のほど何卒よろしくお願いいたします。



この度血液内科部長に就任いたしました米野由希子と申します。平成10年東京大学を卒業し、東京大学医学部附属病院および当院での内科研修の後、駒込病院、東大病院、東

京大学大学院、東京大学医科学研究所を経て、平成22年から平成26年7月まで米国カリフォルニア大学サンディエゴ校に研究留学しました。平成26年8月から当院で血液臨床に携わっております。前任の柳富子医師は顧問として、これまで通り血液疾患の外来診療とHIV感染症/AIDS診療を担当しております。また、本年4月から津田真由子医師が当科常勤医として着任し、より充実した診療体制になりました。

当科では、健康診断の二次検診（貧血、白血球・血小板の増加・減少、リンパ節腫脹など）に加え、造血器悪性疾患、血栓性疾患や出血性疾患など、幅広く血液疾患の診療を行っています。造血器悪性疾患では、主に悪性リンパ腫、急性白血病、骨髄異形成症候群、多発性骨髄腫などの診断・化学療法を行っています。無菌室は2室あり、急性白血物の治療や大量化学療法に対応しています。

近年新規治療薬が多数登場し、より多くの患者さんを救命できるようになりました。特に発展が目覚ましいのが多発性骨髄腫です。点滴治療だけでなく内服治療薬、皮下注射できる薬剤も複数あるため、患者さんの基礎疾患、ADLや生活スタイル、治療反応性などに合わせて薬剤の組み合わせを柔軟に検討できるようになりました。また慢性骨髄性白血病では初発時に使用できる内服薬が4種類となり、主に外来で内服薬による治療を行う疾患となりました。

当院のがん（造血器悪性疾患を含む）治療体制は、以前よりもさらに充実したものになりました。悪性疾患の診療費は高額になることが多いのですが、最近は高額療養費制度の利用申請を当院の総合受付で行っており、治療方針が決まった時点で速やかに対応できます。経済的不安がある場合にはメディカルソーシャルワーカーが対応します。

癌性疼痛がある場合、緩和ケアチームと協力し苦痛の除去に取り組んでいます。退院後に外来化学療法に移行する場合は外来化学療法室の看護師や薬剤師が丁寧なオリエンテーションを行っています。がん治療に伴う食欲低下がある場合は栄養士が食事内容についてきめ細かく対応しています。近年若年者のがん治療体制の充実が重視されていますが、対象者については東京都の若年がん患者等生殖機能温存治療費助成事業への申請も行って

います。当院での検査体制ですが、白血球分画検査や骨髄穿刺・生検は当日対応可能です。リンパ節生検は外科と連携して、受診当日にCTを撮影しスムーズに生検の日程を立てることが出来ます。悪性リンパ腫では病期分類のため全身精査を行いますが、入院で行う場合約1週間でMRI、CT、上部・下部内視鏡、骨髄穿刺・生検、髄液検査、心エコーなどを完了し、速やかに治療を開始しています。

その他、慢性骨髄性白血病、慢性リンパ性白血病、原発性マクログロブリン血症、真性多血症、本態性血小板血症、原発性骨髄線維症、特発性血小板減少性紫斑病、家族性血小板異常症、キャッスルマン病、TAFRO症候群、悪性貧血、自己免疫性溶血性貧血、後天性血友病、von Willebrand病などの診療を行っています。その他の病態、疾患について対応が可能な場合はお問い合わせください。

当科を受診される多くの患者さんは、血液疾患を疑われるまで「血液内科」という分野を聞いたことがなかった、あるいは、家族や知り合いで白血病やリンパ腫にかかった人がいる、と話されます。血液疾患になじみがない、あるいは、重症な血液疾患の経過を知っている場合、いざ受診するときに不安を抱かれることと思います。そのような気持ちに寄り添いながら、患者さんが理解しやすい言葉で説明し、患者さんの全身状態や社会的背景も考慮しながら最適な治療方針を決定するよう、丁寧な診療を心がけております。「百人町で最新の治療を」をモットーに、一人でも多くの患者さんを助けられるように頑張っていきたいと思っておりますので、今後ともよろしくお願いいたします。



皆様はじめまして、令和3年7月から心臓血管外科に着任しました明石興彦と申します。よろしくお願いたします。本日はご挨拶と自己紹介をさせていただきます。

じりじりとした夏の暑さと潮の香りが豊かな徳島県海部郡海南町（現在海陽町）という田舎町で生を受けました。中学2年までの13年間で一度だけ（泥）雪合戦を行うことが出来たくらいの温暖な気候のため、3月から9月までの毎日、午前中から魚が見えなくなるまで、学校以外は台風の日にも海に連れて行かれて銚子で魚を取っていました。そのため体力には自信があります。

中学3年の時に神奈川県藤沢市に転居し、平成8年に山梨医大を卒業しました。幼少期より人の生死に直結する脳か心臓の外科医になると決めており、全身管理が必要な心臓血管外科を専攻しました。卒業後は山梨医大の第二外科に入局しその後いくつかの施設で経験を積み、この度当院でステントグラフト治療の導入を主たる目的として採用されました。

心臓血管手術はまだ死亡率が高く、また回復にも時間がかかる傾向があります。心臓血管外科手術は手術侵襲が大きいこともあり、近年では低侵襲の手術法も多数開発されております。術後管理は患者第一主義をモットーとしており、前職の池上総合病院では患者さんの苦痛の積極的な除去、早期のシャワー・リハビリを導入し、従来型の人工心肺症例で術後ICU滞在日数は平均2.5日（±0.3）、術後初回シャワー開始日は平均3.9日（±0.7）となりました。一般的には1週間はシャワー禁止なので、お風呂好きな患者さんにはおすすめ出来るかもしれません。

当院で開始予定のステントグラフト治療というのは大動脈瘤の治療に用いられます。大動脈瘤は基本的には症状はないのですが、ひとたび破裂すると致死率が高く、また現時点では特効薬は無い

ので、大きい場合は予防的に手術をする必要があります。手術は瘤を切除し人工血管を正常な部位の血管に縫い付けて置換する従来型の手術か、カテーテルを用いて瘤の内側にステントグラフトを内挿（人工血管の中に拡張力のあるステントを組み込み、正常部位の血管壁に押し付けて瘤に血流が到達しないようにします。そのユニットがカテーテルに折りたたまれて格納されています）する方法があります。

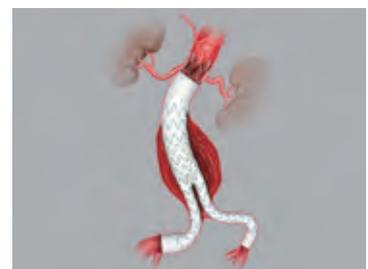
ステントグラフト治療は明らかに低侵襲ですが、標準治療とはなっていません。その大きな理由は、瘤の拡大傾向が抑えられないことが一定確率で生じ、長期成績が今一つだからです。ですので万全な治療とは言えませんが、全身状態が悪く従来型手術が不能な患者さんの福音となること、拡大傾向を抑えられない場合にも従来型の手術を検討できるということもあり、魅力的な治療ではあります。低侵襲の治療は採用されがちですが、確実性の高い従来型の手術とどちらがいいのかはなかなか甲乙つけがたく、ライフスタイルを含め患者さんや主治医の先生方とよく話し合っ決めていければと考えております。

さらに下肢静脈瘤の治療にレーザー治療を導入することとなりましたので、静脈瘤についても簡便でかつ低侵襲な治療を行えるようになりました。緊急手術についても当科は高澤医師、恵木医師との3人体制となるので、今まで以上にお役に立てると考えております。

大都会新宿区にきてしまい田舎者の自分は面食らっておりますが、コロナ感染症の診察を含め地域医療に貢献できればと考えております。今後よろしくお願いたします。



胸部大動脈瘤



腹部大動脈瘤



やまて 東京山手 メディカルセンター

〒169-0073 新宿区百人町3-22-1

総合医療相談センター ☎ 03-3364-0366
FAX 03-3365-5951

<https://yamate.jcho.go.jp/>



この冊子は環境にやさしい有害廃液の出ないクリーン印刷で作成しています